

特別寄稿論文

社会科における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 小倉 勝登

1 社会科における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善のポイント

社会科においては、学習指導要領の第3指導計画の作成と内容の取扱い1(1)において、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善に向けた配慮事項として、次のように示されている。

(1) 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、問題解決への見通しをもつこと、社会的事象の見方・考え方を働かせ、事象の特色や意味などを考え概念などに関する知識を獲得すること、学習の過程や成果を振り返り学んだことを活用することなど、学習の問題を追究・解決する活動の充実を図ること。

つまり、小学校社会科において、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善は、端的に言えば、**問題解決的な学習過程の充実**である。これを実現するには、児童が社会的事象から学習問題を見だし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程などを工夫することが考えられる。

そのためには、教師が社会科の授業を「**単元で考える**」ことが重要である。

そこで、授業改善のポイントを整理すると次のようになる。

- 子供が社会的事象から学習問題を見だし、その解決への見通しをもって取り組むようにする。
- 学習過程を通じた様々な場面で子供相互の話し合いや討論などの活動を一層充実させ、自己の学びを広げるようにする。
- 社会的事象の見方・考え方を働かせて、考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。

2 問題解決的な学習過程の充実

問題解決的な学習過程の充実を図るには、単元全体を通して授業をデザインする必要がある。特に考えたいのは、単元の入り口である、子供が「問題解決の見通しをもつ」場面をどうデザインするか、である。この場面は「主体的な学び」の視点にとどまらず、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業づくりにおいて極めて重要な鍵になる場面である。

しかし、平成24・25年実施の学習指導要領実施状況調査教師質問紙を見ると、「児童の疑問を引き出すような資料提示の方法を工夫していますか。」や「児童に予想に基づいて調べる計画を立てるよう指導していますか。」の問いに対して「そうしている」と回答した割合が他の項目と比べて低くなっている。ここが課題といえる。

(1)「問題解決の見通しをもつ」

「主体的な学び」の視点から大切にしたいことは、子供たちが学習の見通しをもつことである。学習の見通しをもつとは、子供たちが社会的事象と出会い、疑問や予想をもち、学習問題(問い)をつくり、生活経験や既習事項を基に学習問題の解決に向けて予想し、学習計画を立てる、といった「**問題解決の見通しをもつ**」ことである。

問題解決的な学習において、「学習問題(問い)」が重要な役割を果たしていることは言うまでもないが、その上で、子供たちが学習問題(問い)を立てる前後で「予想する」こと、この活動を大切にしたい。子供たちは、まず、生活経験や既習事項と結び付けて解決のために予想するからである。子供自らの予想こそ、学習問題(問い)につながり、学習への見通しにつながっていくのである。そのためには、まず、社会的事象とどのように出合うかが重要である。その出会いが、子供たちの中に驚きや疑問を生み、主体的な問題解決の始

まりとなるからである。さらに、子供たちが、「学習問題（問い）を把握する」ことや解決のために「予想をする」ことを丁寧に扱うことで、子供による問題解決の見通しにつながるのである。

では、第3学年内容(3)「地域の安全を守る働き」の、消防署の働きの導入場面で具体的に説明する。

T【動画】カーテンが燃え、建物に火が移る

- ・発生から全焼するまでが約10分

C：「はい」「たいへん」「たった10分で全焼してしまうと知ってびっくり」

※全焼まであっという間（驚き）

T【資料】昨年の火災発生件数と全焼件数

- ・火災111件 → 全焼0件

C：「0件？どうして？」「よかったけど、0件はびっくり」「全部消したの？」

※全焼が多いという予想とのギャップ（驚き→疑問）

T【問い】なぜ、全焼が0件なのだろう

C：「消防車がはやくかけつけたのではないか」

「火事を見つけた人が、消防車が来るまで火を消して広がらないようにしたのではないか」「消防団の人が消したのではないか」

「消火器があるから、それを使って消したのではないか」

※予想を含んだ問いとなって出てくる

T：学習問題に集約し、共有する

- ・『火事から地域の安全を守るためにだれがどのようなことをしているのだろう。』

※解決する学習問題を共有し見通しへ

T：【資料】火災現場の様子（想像図）

C：「消防士がはやく来て火を消している」「消防団や地域の人が火を消している」

「火を消す訓練をして、全焼しないように消している」・・・（予想）

※学習問題解決の予想を基に、調べる計画を子供たちと一緒に作っていく。

このように、子供たちは驚きをもって「火事」という社会的事象に出合い、「なぜ」という問いをもち「火事から地域を守る働き」を追究していく。この丁寧な流れがあるので子供たちの問いから学習問題が立てられ、予想、見通しも子供たち自身で立てられる。

(2)「問題解決のために話し合う」

問題解決的な学習は、子供が社会的事象から問いをもち、解決の見通しを立て、資料などを活用して調べ、みんなで話し合ったり、考えたりしてまとめる（解決する）学習過程である。つまり、次に大切にしたいことは、「問題解決のために話し合う」ことである。子供たちは、調べたことや考えたことを交流することで自分の考えを深めることができるからである。この場面についても、平成24・25年実施の学習指導要領実施状況調査教師質問紙において、「問題やテーマを決めて、討論する授業を行っていますか。」が他の項目と比べて「そうしている」という回答の割合が低い。社会科の学習において、議論したり討論したりということも含めて解決のために話し合うこと、ここが課題といえる。

では、対話的な学びについて具体例で説明する。

資料1の授業場面では、

○本時の問いを確認し、自分の考えを明確にする。（書く）

○解決のためにグループで話し合う。自分の考えを説明し、友達の考えを聞き、自分の考えに付け足す。

○フリーで話し合う。

○友達との話し合いを基に、再度自分の考えを整理する。（書く）

という活動が行われている。

この実践のように、対話的な学びに大切なことは、学習形態、つまり班活動をすれば対話的な学びになるわけではなく、話し合いが子供にとって必然性があり、友達と話し合うことで、自分の考えを広げ深めることにつながるということである。子供たちに問いがあり、解決したいから話し合う、話を聞く。自分の考えだけでは解決できないから、話し合いたい、話を聞きたいのである。そのためには、「問い」が明確になっていることが大切である。

資料2の授業場面では、教師と子供たちが学習問題の解決のためにどのように進めていくか相談している。



「子どもたちの対話を促し、考えを広げ深めていくために、小グループで使うホワイトボードとは別に個人もちのミニホワイトボードを活用しています。ホワイトボードは、A4程度の大きさのもの、ペンは赤・青・黒の3色を一人一セット机の横にかけています。」

【100円ショップで購入したホワイトボードとペン】



①個人思考

「問い」に対する自分の考えを黒ペンで中央に書く。



「なるほど」と思ったこと、自分にはない考え、理由があればその理由等を「青」で記入する。また、友だちの考えを聞いて、自分の考えが変わったときは、黒ペンで書き加えてもよいこととする。

②小グループでの思考



③フリートーク



教室を自由に歩きまわり、ほかのグループの人、自分が意見を聞いてみたい人のところに行く。ホワイトボードを見せながら、自分や自分のグループの考えを伝えたり、新たな意見を書き足したりしていく。

①～③の手順をふんでから、全体での話し合いを行ったり、個人で考えを再構成する時間をとったりして、対話を通して子どもの考えが広がったり深まったりするようにしている。



資料1 授業場面（考えを深める）

資料2の授業場面では、教師と子供たちが学習問題の解決のためにどのように進めていくか相談している。

資料2 授業場面（活動を決める）

- T：どうやって進めていきたい？
C：グループで話し合う
T：どうしてグループで？
C：グループだといろいろ見つけられる
C：グループだと意見がつながるから
C：グループで話し合うと、考えがわかりやすくなる
C：みんなで合わせるともっといいものになる

この学級の子供たちは、既に、関わり合って学ぶ良さを味わっているのである。また、自分の学びを深めるために話し合うことが分かっているのである。つまり、社会科だけではなく、各教科等の学習で関わり合って学ぶ良さを味わい、話し合うことでよりよい解決につながる経験を積み重ねることが大切なのである。これも「問題解決のために話し合う」上で大切なポイントといえる。

(3) 「社会的事象の見方・考え方をくり返し働かせる」

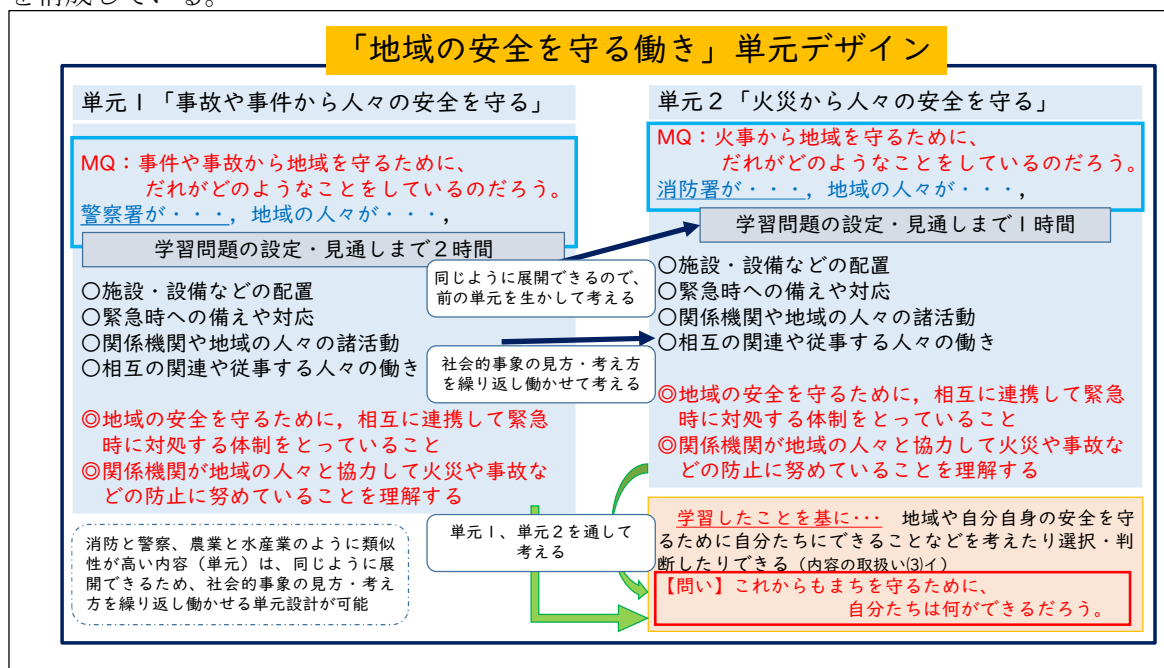
小学校社会科においては、「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、学ぶことを重視する必要がある。「社会的事象の見方・考え方」は、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の「視点や方法（考え方）」であると考えられる。そして、「社会的事象の見方・考え方を働かせる」とは、そうした「視点や方法（考え方）」を用いて課題を追究したり解決したりする

学び方を表すとともに、これを用いることにより子供の「社会的事象の見方・考え方」が鍛えられていく。こうした「社会的事象の見方・考え方を働かせ」ることは、社会科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成はもとより、生きて働く知識の習得に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することなどを踏まえると、資質・能力全体に関わるものであると考えられる。(小学校学習指導要領(平成二十九年告示)解説 社会 P.18 参照)

小学校社会科の学習は、資質・能力の育成のために「社会的事象の見方・考え方を働かせ、問題解決的な学習を通す」ことが求められている。つまり、単元を通して授業を設計する時に、社会的事象の見方・考え方を働かせることを意図的にデザインすることが必要である。さらに、繰り返し社会的事象の見方・考え方を働かせるように単元デザインしていくことで、子供たちの中で社会的事象の見方・考え方が鍛えられ、他の社会的事象に出会ったときに、これまで身に着けた視点と方法で追究を図っていくことになるものと考えられる。

では、「社会的事象の見方・考え方をくり返し働かせる」学びについて具体例で説明する。
〈第三学年内容(3)「地域の安全を守る働き」〉

ここでは、消防署や警察署などの関係機関に従事する人々が相互に連携し、地域の人々と協力して、火災や事故などから人々の安全を守るために行っている働きについて学習する。この「内容のまとまり」は多くの学校で「火災」と「事故や事件」に関する二つの単元で構成されることが多い。その結果、二つの単元において同様の展開で学習を行う現状が見られる。そこで本事例では、学習指導要領の「内容のまとまり」や内容の取扱いを踏まえ、二つの単元の学習を通して単元1の学習を単元2で生かすように設定することを意識して単元を構成している。



例えば、本事例では、学習問題について、予想や学習計画を立てている場面では、単元1と単元2で、ほぼ同様であるため、単元2では、単元1を生かして一時間で設定するように構成している。予想や学習計画が適切に立てられていない子供がいれば、単元1の学習を例に挙げて指導したり、友達の考えを参考にするよう助言したりすればよい。追究の見通しや追究の仕方も単元1と同じように考えればよい。また、よりよい安全な社会を考え、社会生活に生かし、自分たちが地域の安全のためにできることなどを考えるために、二つの単元を関連付けながら、法やきまりの大切さや地域の安全を守る諸活動を振り返り、地域の安全のために自分たちに何ができるかを考える時間を設定した。

このように、類似性が高い内容同士は教師が意図的に単元デザインすることで、子供たちは、社会的事象の見方・考え方を繰り返し働かせながら問題解決を図ることができる。

〈第六学年内容(1)「我が国の政治の働き」(2)「我が国の歴史上の主な事象」〉

ここでは、(1)「我が国の政治の働き」の学習を生かして、(2)「我が国の歴史上の主な事象」に取り組んでいる。

まず、(1)「我が国の政治の働き」の学習の最後に、これまで学習したことを基に『国の治め方』として、国を治める（政治）には、どのようなことが必要か、をみんなで話し合い、整理して、次のようにまとめている。

『国の治め方』 ○しくみ（制度）をつくる ○きまり（法律）をつくる
 ○お金（税）を集める ○外国と関わる（貿易等） など

次に、(2)「我が国の歴史上の主な事象」の学習を展開していく。その時に、(1)の学習のまとめで整理した『国の治め方』を活用する。

小学校の歴史学習は、人物の働きや代表的な文化遺産を中心として学習することとしている。歴史を通史として事象を網羅的に取り扱うものではないことに留意する必要がある。

我が国の歴史は各時期において様々な課題の解決や人々の願いの実現に向けて努力した先人の働きによって発展してきたことを理解できるようにすることが求められている。

そこで、人物の働きに着目して、例えば、「源頼朝は、どのように治めたのだろう」と問えば、子供は、「しくみを作ったのではないか」「きまりを作ったのではないか」…と、政治の学習を生かして予想を含んだ問いを設定していくことが考えられる。このように考えていくと文化を抜かせば、ほぼ、同じ展開で学習を進めることができる。このような単元デザインは、現代の政治の働きと歴史上の事象を関連させていくことにもつながる。

つまり、内容の違いはあっても、同じ視点や方法で追究できるように教師が意図的に単元デザインすることで、子供たちは、社会的事象の見方・考え方を繰り返し働かせながら問題解決を図ることができるのである。教師の仕掛けにより、子供たちは、(1)の政治の学習の学びを生かして(2)の歴史の学習を追究することができるのである。

このように、子供たちがくり返し社会的事象の見方・考え方を働かせて問題解決できるように教師が意図的に単元デザインすることが重要である。これをくり返すことで、子供の中にこの学び方が身について行くことが考えられる。

(1)我が国の政治の働き

※学習の最後に我が国の政治の働きを以下のように整理した

「国のおさめ方」

- 仕組み
- きまり（法）
- お金（税）
- 外国との関わり
- ・・・
- ・・・

(2)我が国の歴史上の主な事象

- (ア)・・・
- (イ)聖徳太子は…
- (ウ)・・・
- (エ)源頼朝は、どのようにおさめたのだろう
 - どのような仕組みをつくったのだろう
 - どのようなきまり（法）をつくったのだろう
 - どのようにお金（税）を集めたのだろう
 - 外国とのかわり、どのようにしたのだろう
 - 調べたことを総合すると…
- (オ)・・・
- (カ)織田信長や豊臣秀吉は、どのようにおさめたのだろうか
 - どのような仕組みをつくったのだろう
 - どのようなきまり（法）をつくったのだろう
 - どのようにお金（税）は…
 - 外国との関わりは…

「国のおさめ方」という点で見えていくと…政治の学習を生かして、社会的事象の捉え方がわかる。それを活用して、歴史のそれぞれの事象を捉えていくように、構想している（見方・考え方）